

丹波と芋銭展図録 正誤表

北島健編著

◎この表の無断転載を禁じます。

頁	訂正箇所	誤	正
6	下段 8行目	課程	全科
9	上段 5行目	この作品が……「河童短冊」(出品番号29)と考えられる。	「河童短冊」の印影は「菅簞」、この別号は昭和3年から使用開始。したがって、泊雲が最初に依頼(大正5年)した作品には含まれない。
9	図3 作品題名	紵銭道人洗面之池	紵泉道人洗面之池
9	下段 2行目	紵銭道人洗面之池	紵泉道人洗面之池
10	冗談 17行目	翌昭和十二年(一九三七)	翌昭和十四年(一九三九)
11	下段 19行目	図版出展一覧	図版出典一覧
11	下段 23行目	紵銭道人洗面之池	紵泉道人洗面之池
38	下図 作品制作年	昭和7年	昭和3年頃
47	左図 作品題名	大野涼颯颯々	大野涼颯颯々
53	中図 作品題名	酒星眼回泉不尽	酒星昭回泉不尽
54	中図 作品題名	清流有韻	淺流有韻
65	上段 4句目	鷹鳴いて蘭若の秋の晴に座す	鷹鳴いて蘭若の秋の晴に坐す
65	上段 8句目	王羲之の子に子猷あり雪に竹	王羲之の子に子猷あり雪に竹
65	下段 7句目	五月雨や月夜に似たる沼あかり	丹波で詠んだ句ではない
65	下段 9句目	秋の峰影重なりてくれにけり	丹波ではなく、妙高で詠んだ句
68	中段 後から3行目	明治二二(一八八九)年	明治二一(一八八八)年
68	下段 1行目	噴火によってできた穴に水が溜まって沼となった	噴火に伴う山体崩壊によりできた堰き止め湖
69	上段 11行目	池田竜一	池田龍一(人名は簡略化不可)
69	上段 「老子」賛	昭和十一年	昭和第一春
69	中段 「桃花源」賛	(第二扇) 往跡浸復湮	(第二扇) 往跡浸湮
70	上段 「水虎」ルビ	すいこ	かつぱ(芋銭自身がルビを付す)
70	中段 8行目	癩瓜水蟲	癩(やまいだれ)瓜水虫
70	中断 9行目	宇宙虚霊	宇宙間虚霊
70	中断 9行目	方寸を導く	方寸を誘びく
70	下段 「那須野の馬」賛	給へとかし侍ぬ	給へとかし侍りぬ
70	下段 「那須野の馬」賛	馬に銭つけてかへしやる	馬に銭つけて返しやる
70	下段 「那須野の馬」賛	芋銭子図	芋銭子
71	下段 「河童書画屏風」賛		秋水時至 百川灌河 溪流之大 兩涘(これが抜け落ちている)
71	下段 「河童書画屏風」賛	順流而東行至於北海	順流而東行於北海
71	下段 「河童書画屏風」賛	於是焉河伯始旋其面目	於是焉河伯旋其面目
71	下段 「河童書画屏風」賛	望洋向若而歎曰	望洋而向若歎曰
72	上段 「朱面河童」賛	魚龍萬千天空寂	魚龍萬千相食噉
72	上段 「朱面河童」解説	天空は寂たり	誤解読のため解説は異なる。付け加えれば、出典は「寒山詩」。
72	上段 「朱面河童」解説	天空はひっそりと……象徴的に表現したものであろう	誤解読のためこういう解説にはならない。
72	下段 6行目	木に引っ掛かった奴風	木に引っ掛かったトンビ風
72	下段 7行目	小豆粥	赤豆粥(年中行事「庭中神」)

73	中断 「山嶽不動」制作年	昭和7年	昭和3年頃
73	下段 短冊の読み	秋の峰影重なりてくれにけり	秋の峰影重りてくれにけり
73	下段 短冊の解説	丹波を訪れた際、折々に作った俳句を記したもの	「秋の峰」の句は、妙高での作
74	上段 「李青蓮独酌」賛	但得酒中趣	但得醉中趣
74	上段 「李青蓮独酌」賛	勿為醒者伝	勿■醒者伝(為とは読めない)
74	中段 「神農」款記	芋銭子	菖浪子
74	下段 1行目	萬朝為須臾	朝萬期為須臾
74	下段 4行目	於是方捧鬯	於是捧鬯
74	下段 5行目	不覩泰山之形	不見泰山之形
74	下段 6行目	萬物擾擾焉	萬物之擾擾焉
74	下段 7行目	如螺羸之與螟蛉	如螺與螟蛉
75	上段 「玄真子」賛	興風水広	香風水席
75	上段 後から1行目	「風に興じて水広し」という…末広がり の扇面に…より強められている。	「玄真子(張志和)は、水の上に席(むしろ)を置き、その上に坐す姿で描かれることが多い。誤解読のため解説文も異なる。
75	中段 「馬上の河童」賛	曳来釣欲千万客 芋銭	曳来駒歎千万客 芋銭併題
75	中段 後から3行目	「曳来たりて」のルビ ひ	ひき
75	中段 後から3行目	「曳来たりて釣らんと欲す、千万の客」	曳来たるは駒か、千万の客
75	下段 「毬子之句」款記	芋銭子	芋銭子書
76	上段 「丹陰雲霧」賛	拏雲握霧 芋銭子	拏雲攫霧 芋泉子 ※大正15年11月開催の東京会展出品作「颯の飛ぶ煙霧」にも同じ画賛が認められる。
76	上段 「丹陰雲霧」解説	「雲を拏み、霧を握る」	「雲を拏え、霧を攫む」
76	上段 「丹陰雲霧」解説	『宣和遺事』などに見える故事成語で、…手練手管の意を持つが、…	『碧巖録』第六十則「雲門拄丈子」頌(出典も解説も異なる。)
76	上段 「うさぎ」賛	他郷之秋云々	他郷之秋 沼の故郷は雨月なりしよ友の文
76	上段 「うさぎ」解説		友からの手紙で「沼の故郷は雨だ」と知る。賛を解説しないから、解説を誤る原因となる。芋銭が月と兎を描く場合、良寛の「月兎長歌」を常に意識している。本展出陳の、17「十二支図巻」もこれにならっている。
76	中段 作品題名	「大野涼颯颯々」	「大野涼颯颯々」
76	中段 「大野涼颯颯々」賛	大野涼颯颯々 長天歩自濛濛	大野涼颯颯々 長天疎雨濛濛
76	下段 1行目	「大野に涼颯、颯々として、長天に歩まば自ずから濛濛」	「大野は涼颯颯々、長天は疎雨濛濛たり」誤解読のため解説は異なる。
76	下段 4行目	出典は明らかではないが、…	出典は、『碧巖録』第二十七則「雲門体露金風」頌
76	下段 4行目	芋銭が丹波での経験をもとに詠ったものの可能性もある。	『碧巖録』が出典だから、この解説は異なる。
76	下段 「陶淵明桃花源」賛	雖無紀歴誌	雖無紀曆誌
76	下段 「陶淵明桃花源」賛	一朝敵神界	一朝神界
76	下段 「陶淵明桃花源」賛	願言躡輕風 焉測塵囂外 高举尋吾契	願言躡■輕風 高举尋吾契(一字あり)
76	下段 「陶淵明桃花源」賛	陶淵明桃花源詩	陶淵明桃花源詩
77	上段 「星輝泉流」款記	為泊雲居士	為泊雲居主
77	中段 「帰去来辞」賛	松菊猶存携幼	松菊猶存携
77	中段 「李白把酒問月」賛	古人今人若流水	古人今人如流水

77	中段 2行目	流水の若し	流水の如し
77	下段 「雪竹俳句」賛	王羲之の児に子猷あり雪に竹	王羲之の児に子猷あり雪に竹
77	下段 「雪竹俳句」賛	丹陰雪晴れて新酒の竹に対して	丹陰雪暗し新酒の竹に対して
77	下段 「雪竹俳句」解説	解説文中の総ての王猷之	王徽之
77	下段 「雪竹俳句」解説	* 解説全文	王徽之について解説すべきところ、王猷子について解説しているので、全文削除さるべき。
78	中段 作品題名及び賛	「酒星眼回泉不尽」	「酒星昭回泉不尽」
78	中段 「酒星昭回」解説	「酒星、眼を回りにて泉尽きず」とは、…	「昭回」とは、「昭は光、その光の天に随いて回る」という意。泊雲宛の芋銭の書簡中にも、この言葉は認められる(殊に酒星愈昭回本年は特に美釀の由、昭和3年2月18日付)。誤解読のため解説は異なる。
78	下段 「蓬萊月」款記	芋銭書	芋銭子書
78	下段 作品題名	清流有韻	■流有韻(清とは読めない)
79	中段 後から3行目	丹波を連想すると共に	丹波を聯想すると共に
79	中段 後から2行目	古武士的風格を想させる	古武士的風格を想はせる
79	中段 後から2行目	黙々たる魯男子の信ずる処	黙々たる魯男子。信ずる処
79	下段 1行目	君は酒造業の傍ら古るき	君は酒造業の傍 古るき
79	下段 2行目	以前より俳句を嗜なみ	以前より俳句を嗜し
79	下段 2行目	之を以て性状陶冶の具としたる	之を以て性情陶冶の具とした
79	下段 2行目	則君の俳句も	則君の俳句は
79	下段 「拾得」賛	晴天白日怒雷奔	晴天白日怒雷走
79	下段 「拾得」解説	「怒れる雷、奔る」	「怒れる雷、走る」
79	下段 「拾得」解説	「成す」に繋がる「茄子」を、串で貫いた様子で示すことで、…	芋銭の描く「拾得図」の殆どは、「ナスビ」の串刺しを手を持つ。従って、「成す」には繋がらない。
80	上段 「桃花源」賛	斑白歎游詣	斑白歎遊詣
80	上段 「桃花源」賛	雖無紀歴誌	雖無紀曆誌
80	上段 「桃花源」右隻賛	願言躡輕風 焉測塵囂外 高舉尋吾契	願言躡 ■輕風 高舉尋吾契(一字あり)
80	上段 「桃花源」左隻賛	桃花在何処	桃花在何許
80	上段 「桃花源」左隻賛	踏花去	躡花去
80	上段 「桃花源」解説	桃源、何処にか在らんや	桃源、何許にか在らんや
80	上段 「桃花源」解説	花を踏みて去かん	花を躡みて去かん
82	略年譜 明治四年	帰農する。	芋銭は帰農できない。移住が正しい。
82	略年譜 明治三七年	地方誌『いはらき』	地方紙『いはらき』
86	作品目録 8行目	大野涼颯颯々	大野涼颯颯々
87	作品目録 2行目	酒星眼回泉不尽	酒星昭回泉不尽
87	作品目録 5行目	清流有韻	■流有韻(清とは読めない)
88	下段 1行目	④小川芋銭著・酒井三良編	④小川茂吉著・斉藤隆三編
88	下段 ④の解説	手紙を、上下巻として翻刻したもの、	手紙は、下巻にのみ収録





